



感染症とたたかう

第13号

2016年
12月発行

発行：国立大学法人 長崎大学 監修：長崎大学病院 感染制御教育センター長・教授 泉川 公一
お問い合わせ：長崎大学熱帯医学研究所 〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4 TEL：095-819-7800（代表） FAX：095-819-7805

● 私たちの暮らしと感染症 ●

感染力の強いおたふく風邪 特に子どもはワクチンで予防を



耳の下あたりに腫れと痛み 不顕性感染が多く、流行しやすい

おたふく風邪の正式名称は「流行性耳下腺炎」といいます。耳の下のあたりが腫れて痛むのが特徴で、おたふくのような顔つきになることがあり、おたふく風邪と呼ばれています。小さな子どもがかかりやすいウイルス感染症で、多くの子どもが幼児のうちに感染し、免疫をつくります。子どもがかかる感染症としてよく知られたものですが、人にうつりやすいので注意が必要です。

おたふく風邪の原因となるのは「ムンプスウイルス」です。ムンプスウイルスに感染すると、2～3

週間（平均18日前後）の潜伏期間ののちに症状が出てきます。片側あるいは両側の耳の下、頬の後ろ、あごの下といった耳下腺（唾液を作る場所）が腫れます。1～2日で腫れ、通常1～2週間で回復します。

ムンプスウイルスは、感染している人との会話やくしゃみ、咳などによって、ウイルスを含む飛沫を吸い込むことで感染（飛沫感染）します。また、ウイルスがついた物や感染者に触れることによる感染（接触感染）もあります。感染力は強いのですが、病原性（症状を引き起こす力）は弱く、感染しても症状が出ない場合（不顕性感染）が30～35%あるといわれています。ただし、不顕性感染でも免疫が作られるまでは、感染した人からウイ

ルスが排出されるので、他人にうつす可能性があります。これが、感染拡大の一つの原因になっています。

おたふく風邪の症状には、耳の下の腫れや痛み、発熱があり、痛みで食べたり、飲んだりすることができなくなることがあります。頭痛や嘔吐、腹痛を伴うこともあります。3歳ぐらいになれば、こうした症状を訴えることができますが、1歳未満の子どもの場合は、症状が分かりづらいので、機嫌が悪い、食欲がない、顔がいつもより何となくずんぐりしている感じがするようであれば、おたふく風邪を疑います。

多くの場合、こうした症状は1~2週間で回復しますが、3日ほど経っても腫れが引かなかったり、熱が続き激しい頭痛や嘔吐、けいれんがあったりする場合は、ウイルスによる髄膜炎などを起こしている可能性があるため、早めに医療機関を受診してください。

特効薬はなく自宅療養が基本 食事は柔らかく喉ごしのよいものを

おたふく風邪には特効薬はないため、治療の基本は、解熱鎮痛薬による発熱や痛みに対する対症療法となります。また、腫れや痛みによって、食事をうまく摂れないこともあります。飲み込むときに喉が痛む場合もありますから、症状が落ち着くまでは、あまり噛まずに食べられるゼリー飲料や、プリン、ヨーグルトのような飲み下しやすいものを食べさせてください。ポタージュスープなどで栄養が少しでも取れる工夫も必要です。

高熱が続くと、脱水症状と食欲の減退が起きます。経口補水液などで水分補給するほか、牛乳、豆乳など飲みやすいもので栄養を補ってくださ



い。ただし、野菜ジュースやフルーツジュースは、酸味が唾液腺を刺激して腫れによる痛みを強くするので避けるようにしてください。

おたふく風邪になると、保育園や幼稚園に通っている場合は登園できません。周囲に感染を広げないためです。また、同居する家族などで、おたふく風邪にかかったことがない人がいたら、感染が広がらないように気をつけましょう。

ワクチン接種で9割に予防効果 1歳を過ぎたら接種の検討を

おたふく風邪の感染を予防するには、ワクチン接種が有効です。ワクチン接種後に、ムンプスウイルスに対する抗体ができているかどうかを調べたいいくつかの報告によると、90%前後の人が、ウイルスに有効なレベルの抗体を獲得したとされています。つまり、ワクチン接種によって、9割の人が予防効果を得られたと考えられます。

おたふく風邪のワクチンは、現在、わが国では任意接種なので、費用は自己負担する必要があります。1歳を過ぎたら受けることができますので、かかりつけ医や近所の医療機関に相談するとよいでしょう。

次号(2017年1月号)では「水疱瘡」を取り上げます。